

小樽33年の思い

山 本 久 雄

小樽商科大学に赴任したのは33年前、1986年10月1日であった。生後18年間は郷里高知県、大学・大学院は東京で過ごした。それが、本学で教育・研究の場を与えられ今日に至るとは思いもよらなかった。高知、東京と言えばほとんど雪に縁のない地。そのような場所で育った人間が、果たして雪国、しかも北海道で生活していけるのか、来樽前は甚だ心配であった。当時の大学教職員、特に英語教員の方々に、冬服・冬靴の選び方、雪上の歩き方をアドバイスして頂き、また、本州・四国よりも優れた暖房設備も相まって快適に過ごすことができ、その不安は直ぐに解消された。50年前の高等学校時代、母校から小樽商科大学を受験するものが毎年数名はいた。それもあって、本学の名前は常に記憶の中にあった。この歴史ある名門大学で教壇に立つ機会を与えられたことは感謝の念に絶えない。

私の主たる研究テーマは言語に関するもの、いわゆる言語学であった。その中でも、言語能力の仕組みを探究する生成理論を基に、言語とは何かを解明することに取り組んできた。言語が持つ幾つかの側面（音声、語、文、意味、習得）の中で、特に時間を費やしてきたのは文の分析、即ち統語論と呼ばれる分野であった。英語をターゲットとする研究が中心の領域ではあったが、非英語母語の生成文法論者も増えるにつれ、英語外の言語を題材とする論文・著書が盛んに発表され、生成理論の主要テーマである普遍文法に関して様々な考えを得ることができた。

小樽商科大学で担当した科目は一般英語と教職科目であった。前者では、教養としての英語という観点から、言語外のテーマについて書かれた教材も使用したが、後者では、英語教員免許取得のことを踏まえ、専門内容（英語学）の授業を行った。同時に、英語の歴史（英語史）に関する講義も心掛け

た。何らかの形で英語に携わるからにはその歴史に触れることは重要であり、入門的な知識であれそれを学ぶことは無駄ではないと考えたからである。この英語史の授業は自分にとっても意義あるものであったということは言うまでもない。

本学で英語科目を担当して30年以上が経過した。その間、いささか学生諸子の様子も変わってきたように思われる。個人的には一般英語の授業でその変化がより感じられる。言語を扱う場合には文法用語を使用せざるを得ない状況も生じ得る。当初はその文法用語を理解している学生も多くいたが、ここ数年来、当然知っているであろう用語を知らない、聞いたことがない、聞いたことがあってもその意味をよく認識していないという学生が増えてきた。ただ、教職科目は、以前と変わることなく文法知識を身に付けた履修者で占められていた。本学学生の優秀さが垣間見られ、うれしいかぎりである。

英語科目としてゼミナール授業を担当したことを付け加えておく。赴任当初は、現在の昼間コースに当たる学生を指導した。当時は中学・高等学校の教員を目指すものが多くいたが、生成理論なるものに初めて接したのではなかろうか。しかし、その知識を吸収しようと常に目を輝かせて授業に臨んでいた。後年、ゼミナールの授業が大いに役立ったという言葉が教壇に立っている卒業生から何度となく聞いたが、そのたびにゼミナール担当者としての喜びをかみしめてきた。退職数年前には夜間主コース学生のゼミナールになったが、昼間コース学生に劣らず熱心な履修生であった。

小樽商科大学で過ごした研究室は目の前に雑木林の見える3階（途中から5階に移転）にあった。しかし、研究棟から一步外に出て北方に目を向ければ、日本海、遠くは増毛連峰が一望のもとに見渡せた。そのような自然環境の中で、教育・研究に従事できたことは幸せであった。また、図らずも、名誉教授称号授与並びに人文研究記念号出版の栄誉を賜り、ここに厚く御礼申し上げ拙文の結びとする。